

特集／思春期の精神医学的諸問題

まえがき

笠 原 嘉

この特集におさめられた 4 篇は、昭和 54 年 12 月 1 日野口記念会館（東京）でおこなわれた第 7 回東京都精神医学総合研究所シンポジウム「思春期の精神医学的諸問題」での講演に加筆されたものである。当日の講演は、研究所の石井毅、宇野昌人両氏によってえらばれた村瀬、清水、岡部、小倉の 4 氏がそれぞれに全く異ったアプローチの臨床家であったこともあって、講演内容も多岐にわたり、「思春期」に関する講演会としては聞きごたえのあるものであった。事実、当日は主催者側の予想をはるかに上回る熱心な聴衆をえた。当日光栄にも司会役を仰せつかった者として、講演についての簡単な紹介をおこない、この特集の序言にかえさせていただく。

「正常な」青年はどのようにその青年期を通過していくのか。これを実証的にしらべるには「正常な」青年を継年的に追いかけるしかない。村瀬孝雄氏は今日のところ日本でのおそらく唯一の研究者であろう。これまでの氏の一連の研究のあとを承けて、ここでは 3 ケースを通じて青年「前期」の変化過程に焦点があわされた。樹木画、人物画の提示は氏の説くところを具体化し、聴衆に感銘を与えた。いうまでもなく「正常」青年についてのこの種の観察は、病理ケースから入るのをつねとする精神病理学的研究にとって、相補的な意味ですこぶる大切である。

清水将之氏の講演は、昭和 40 年から 52 年にいたる 12 年間に阪大精神科青年期外来をおとずれた青年患者についての診断と経過にしばっての報告であった。清水氏らは全国にさがけて青年期外来を開設した。この種の研究を行なうのにもっともふさわしい人であろう。青年ケースを治療した人なら誰でも知ることだが、青年期の病態は成

人の病態にもとづいて作られた現行の教科書の診断区分、亜型区分にうまくおさまらない。この点についていかなる提案があるかに注目していたところ、果たせるかな「人格形成不全」「仮性破瓜病」などといった“新語作成”によって、この種の研究がえてしてもつまみ乾燥さを少しも感じさせなかったのは、さすがであった。今後の討論の素材となる研究であろう。

次に岡部祥平氏の講演は、15 歳以前に発症する比較的稀な分裂病 17 例について平均 15 年の経過を入念におった地道な研究の報告であった。ここ数年間入院がなく社会適応しているケースも 4 例ある反面、「現実との不調和に悩みながら、今もって思春期のステージに果たし得なかった統合を、牛の歩みのように育くんでいる」ケースの多いことから、われわれは眼をそらすべきでないだろう。

最後に登場した小倉清氏は、今までの 3 氏のどちらかというアカデミックな講演とうってかわって、具体的実地的な治療論を展開し、聴衆を魅了した。氏の潤達にして精力的な風貌は、今日の青年ケースへ期待される一つの治療家像かもしれない。氏もくりかえして説くように、今日の青年への治療家には、これまで治療家というとき想像されたより何層倍もの行動力と速断力が要求される場合が稀ならずあるからである。

青年期・思春期の精神医学はまだはじまって日が浅い。加えて青年期が文化や時代の刻印をことのほかうけやすい発達期であるとすれば、われわれは自分たちの経験の集積に今暫く精を出さざるをえまい。他方、外国での業績にも横目で注意をはらいながら。

この特集がそのような臨床的努力へ刺激となることを切望する。（名古屋大学医学部精神医学教室）